

# PONTE

## 「書く」 ジャグリングの雑誌「ポンテ」：創刊準備号



(撮影：青木直哉)

### 今号の記事

創刊準備の辞 青木直哉

ジャグリングエッセイの試み（1） 青木直哉

# 創刊準備の辞

## ジャグリングをする

### 手をつなぐ

青木 直哉

ジャグリングの文章が書きたい。

こんな思いが雑誌になります。ばば〜ん、と創刊する予定でしたが、創刊の前に、準備運動です。

この雑誌は、まず創刊者自身のためがあります。なぜなら、創刊の動機が、私自身がジャグリングの文章を書きたいと思ったから、だからです。

ですが創刊者に共感を持ってくれる方がもしいて、さらにこの場を以って真剣に書くということを楽しんでくれたらそれに勝る喜びはありません。なので個人の楽しみにとどめず、読者の方からの寄稿も募集します。

ジャグリングで書くって、なんだろう、どういうことだろう、と思われている方もいらっしゃるでしょう。創刊者にもよく分かりません。だから、こういう雑誌を作ってみたのです。

そもそもジャグリングは「やること」であって、「考えること」ではないのです。これは恩師が語った言葉を自分なりの信条にしたものです。ジャグリングは、鉄

の壁だ。それでもやっぱり書きたい、そんなことは無駄だと分かっているけど、でも猫のようにかりかり爪を立てたい。ものを書くというのはそういう虚しいことなんだ。ですがそういう「爪を立てたい」という気持ちをないがしろにするのも、やっぱり違うな、優しくないな、という気がします。だから、ここはそんな「書きたい」という気持ちを、気持ちのままにしない、爪を立てさせてあげて、少し嬉しくなってもらうための、そういう場です。

ポンテ、とは、イタリア語で「橋」という意味のことばです。橋は、島と島をつなぎます。それがかかるまでは在ることすら知らなかったものを見せてくれます。そんなジャグリングのなにかを「つなぐ」存在であったらいいな、という思いをこめて、「ポンテ」がまもなく創刊します。まずはテンポよく隔週刊行予定。■

# ジャグリングエッセイ の試み（1）

これから書くこと。

青木直哉

現在編集長は大学四年生で、もうすぐ卒業します。すでに卒業論文は出しています。

さて、卒論でジャグラーを扱った、というと驚かれます。実際、一般に想像されるような「論文」とは随分違う文章が出来上がりました。ですがジャグリングについて考える、ということに関して考えを深められたので、意義はありました。というより、真剣に書くと、ジャグリングについてだって、結構書けるじゃないか、と思ったのです。

そこで脱稿するまでに、様々な「論考のタネ」のようなものが頭にぼつぼつまかれたのと、単純に、筆者はいったいこれまでジャグリングを通してなにを見てきたのだろう、ということが気になり始めたのと、それを文章でかたちに見てみたくなってきました。

こういう経緯でこの雑誌もできるわけですが、読んで面白くないようなものも書きたくないので、この場をもって、しばらく一般性を持ったゆるめのエッセイ

も書いてみようと思います。せいぜい頑張ります。

併せて、少し硬めの論考のようなものも書いていきます。今回は、埋め草に、去年の秋に、その年の夏のイタリア渡航時の経験をもとに書いた文章を加筆修正して掲載。筆者は2012年から一年間イタリアに留学していました。その時に仲良くなったジャグラーの話です。

\*

イタリア半島の西に位置するサルデーニャ島。ここにリッキーという35、6歳の友達がいる。いや、38歳だったかな。彼も僕と同じくジャグラーである。彼とは2011年の10月に、シエナの近く、エンポリのジャグリングの大会で出会った。もう2年前だ。リッキーは生まれてからこの方ずーっとサルデーニャ島の州都、カリアリに住んでいる。もちろん旅行などで他の国に行ったりしたことはあるんだけど、小学校から大学まで、そして今の職場も、ずーっと、カリアリ。そんな身の上で、町もすごく小さいから、外を歩けば知り合いに必ず会う。僕がサルデーニャ島に行くと大体リッキーに車や自転車で色々な所を案内してもらうのだが、知人の車を見つければクラクションを鳴らして振り向かせ、路上で久しぶりに友達に会えば抱き合い、かつて

の彼女にばったり会うことなどもざらだ。とにかく、どこへ行っても、「知っている事」だらけなのだ。

横浜に22年間と少し住んできた僕は、地元の友達など今はほとんど付き合わない。イタリアにいるリッキーの方が、よほどマメに会っている。地元で生涯住み続けている、というのは、きつものすごかつまらないんじゃないかと思うと同時に、でも少し懂れる。人間らしいような気がする。あったかい気がする。ちなみにサルデーニャは、すごくあったかい。気候の話だが。

シエナなども本当に小さいから、状況は似たり寄ったりかもしれない。多くの人々はこういう風に生活のリズムも、景色も変わらない中で、ニッポンの都会に住む僕とは全く違った精神性を育てているのだろう。

サルデーニャに話を戻すと、リッキーには最近子供が生まれた。名をジュリアという。僕が留学していたころから、お母さんのジョルジャのおなかの中にいて、生まれたのは確か去年の11月くらいだった。今回わざわざサルデーニャ島に立ち寄ったのは、このジュリアを一目見に行きたかったからであった。友達に赤ちゃんが生まれた、というのも実は初めての経験で、赤ちゃんを抱いたことすらな

かった。僕はこれまで22年間の人生の中で、まるきり、自分よりもうんと年下の子供や、赤ちゃんというものに縁のない生活を送って来たのである。親類にも自分より年下の人間がいなかったから、中学校の頃初めて部活で「面倒を見るべき後輩」ができた時など、期待感とともに、すごくうろたえたのを覚えている。

ジュリアは、まだまだ、本当に小さかった。おむつを履いて、ゆりかごの中で、すべてが新しく見える、といった目つきで、辺りを一生懸命見回していた。まだまだ、言葉も喋れない。しかし、何かを訴えたい、主張したい、という気持はあると見えて、時折、僕や、お父さんのリッキーや、部屋にぶら下がる電灯や、ぬいぐるみや、とにかくいろんなものを指差しながら、「うー」とわめいていた。

騒がしいジャグラーのお父さんと、デザイナーで絵描きである美人なお母さんに話しかけられながら育って、じきにこの子もイタリア語を話すようになるんだなあ、と僕はこれからのことに思いを馳せて、不思議さを感じるとともに、明るい気持になった。

きつと3、4年もして、また会いに行ったら、すっかり成長して、言葉も喋れるようになっていっているんだろうな。その頃になれば、僕の顔も覚えてくれるだろ

うか。ジャグリングをやっているのだから。  
うか。たぶんやっていないだろうな。

そして10年経ったら。顔立ちもはつきりし始めてくるんだろう。そして20年経ったら。もう、すっかり島生まれの美女として風格を漂わせているのかもしれない。なんせ両親が美男美女だからな。芸術を志したりしてるかも。

こんな風に、人の子供でさえわくわくしてしまうのだ。自分の子供なんか出来た日には。

友達に子供が生まれる、って、すごくいいね。

(2013年10月に書いた文章に加筆修正)



## 編集部より

ついに動き出しました、ジャグリングの雑誌。一ヶ月くらい出すぞ出すぞと意気込んでいたものの、なかなか一步が踏み出せず。いよいよもってとりあえずえいやっ、と、出してしまいました。あまり内容は充実しているとは言えませんので、そのために「創刊準備号」と銘打っておきます。文字中心で、なるべくシンプルにかっこよく、を目指して。趣旨は一貫して、「ジャグリングで、書くこと」。逆に言えばそれ以外、なんでもいい。編集長は、海外のジャグラーの紹介に力を入れたいなと思っているところですが、どうなるでしょう。坂を転がる雪玉のように、宣言と広報による不可抗力でごろごろと転がっていきたい。■

## 記事募集のお知らせ

編集長

冒頭でも述べましたように、皆様からの記事も募集致します。こちらから声をかけさせていただく場合もあります。ただ送ってきたものはなんでもかんでも載せるといふわけにもいかないのです、一度編集長の査読で誤植、内容の確認を経てから掲載となります。期限は、発行の3日前の23:59までです（隔週発行）。間に合

わなかった場合、次号へ持ち越し。体裁はこちらで整えます。基本的にはプレーンテキスト形式で、「執筆者名」「タイトル」「本文」が必須項目です。記事の長さは基本的には2000字（原稿5枚）を上限に書いてください。内容は、ポンテですので、ジャグリングと何かをつなぐ、というあたりを意識していただくと、いいと思います。特別長いものを載せたい場合は、相談にも応じます。他にもなにかある場合は編集長宛にメールをお送りください。まだ実験期間中なので、色々試します。

ツイッターやその他ソーシャルメディア上ではない、まとまって書く場を提供したいという思いから作ったものでもあるので、感想がある場合も、基本的には編集長宛のメールでおねがいします。この場をもってできるかぎり回答します。軽く一言でも構いません。お待ちしております。

編集長

青木 直哉

jugglerna0あつと@gmail.com

次回発行は2014年2月24日（月）です。



## 次回予告

ジェイ・ギリガン特集を予定。編集長が先月提出した卒論のテーマにもなった、アメリカのジャグラーです。■